

徒然Locus of F

よしおか

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主に閃の軌跡で思いついたネタを不定期に投稿。基本的に話と話のつながりはありません。

目次

単発ネタ

もしもリインがキレる若者だったら

1

もしも主人公が女オリ主だったら

もしも主人公が女オリ主だったら。

10

女オリ主のオリエンテーリング ―バ

ラバラな、彼ら ― 19

女オリ主と副委員長とのあれこれ・4

月 ― 35

単発ネタ

もしもリインがキレる若者だったら

リイン・シュバルツアーにはある悩みがあった。それは、自身の気質の問題だ。

きつかけはなんだったか……そう、数年前のあの雪の日のことだ。

『兄様っ、血が……!』

『大丈夫、大丈夫だから……』

故郷の野山で起こった急激な天候の変化と、それに妹のエリゼと二人で巻き込まれたのだ。

乱雑に生える樹木を切り払う為の鉈しか持っていない、そもそも幼いリインとエリゼの二人だけで雪山に取り残されるといふ状況が既に危険さを物語っていると云うのに、よりにもよって二人は野山にいる筈の無い熊型の魔獣に出くわしてしまった。

飢えた獣の爪は幼い二人にも容赦なく振るわれ……気が付けば、妹だけは守らねばと奮闘したリインは、あちこち打撲と切り傷でぼろぼろだった。

『うああっ!?!』

『兄様っ！』

それでも倒れてはならぬ、と鉈を振るったリインだったが、ついにその剛腕の前に倒れ伏してしまう。血の池に沈む……と言うのは多少大袈裟だが、少なくとも甦るようには痛めつけられるリインを間近に見ていたエリゼには、そう見えてもおかしくなかった。

『兄様っ、兄様！ いや、目を開けてっ、兄様あ……！』

雪の上に倒れ伏したリインに縋り付き、エリゼは必死にリインを揺さぶる。怪我人に乱暴な、と彼女を咎めることは出来ないであろう。それだけ彼女は混乱し、リインを案じていたのだから。

『グルルル……！』

『ひっ、あ……！?!』

唸り声を上げてのそのそと歩み寄る魔獣を前にして、エリゼは恐怖に押しつぶされそうになりながらもリインの身体に覆い被さり、兄をこれ以上傷つけさせてなるものかと彼女なりに守ろうとする。

(あ……エリ、ゼ……)

痛みと、血を失う脱力感の中で段々と意識を失いつつあったリインは、その時確かに見た。自分よりも幼い妹が瞼をきつく閉じ、口元をきゅつと引き結んで恐怖に耐えるその姿を。そしてその妹に襲い掛かろうとしている獣の、獲物にあり付く瞬間の狂喜の表

情を。

(……………ふざけるな……………)

それを、見過ごしてはならぬと思った。血の繋がらない自分を家族として愛してくれた大切な人達を守るために、今立ち上がらなければと思った。

怪我が何だ、今動かねばエリゼは自分よりも痛い思いをするんだぞ！

恐さが何だ、自分が立たねば父上と母上に家族を失う痛みと悲しみを味わわせてしま
うのだぞ！

『こ、のっ……………エリゼに、それ以上近づいたら……………い！』

エリゼを押し退けて立ち上がり……………幼いリインは己に喝を入れる。

短い人生の中で、地元の子供の喧嘩や、猟師たちの会話で耳にしたことはあっても口にしたことなどついで無かったその言葉は……………

『掻っ捌いて鍋にしてやるぞ、この毛玉野郎おっ!!』

自分でも驚くほど、するりと口から滑り出た。

(……居心地が悪い……)

時は過ぎて、現在。リンは好奇と恐れの入り混じった視線に晒され、心持ち背中を丸くしていた。

彼が今年から入学することになった、帝都近郊にある有名高等学校『トールズ士官学院』の旧校舎でリンを始めとする九名は何故か、ある特別なオリエンテーリングに参加していた。

最初に落とし穴に叩き込まれた時点で一人の女子生徒とトラブルになってしまい、誠心誠意謝罪したものの怒り心頭の彼女には視線を合わせることもすらしてもらえず——
—実際には、はじめて超至近距離で家族以外の男性に触れた気恥ずかしさによるものだったらしいのだが——ひとまず、男子生徒達からの同情にすこしだけ持ち直したリンは、その場に居た男子生徒達と共に旧校舎の奥へと進んでいたのだが。

進んだその先で、一行はとんでもない物と遭遇した。旧時代の遺構の片鱗、石の守護獣ガーゴイルだ。

『なななな、なんでこんなものが学校の地下にいつ!?!』

『帝国というのはこんな怪物がごろごろ居るのか…?!』

『そんなわけがあるかつ! 流石に古い伝承の中だけだ!』

『とにかく構えろっ！ 全員でかかれれば何とかなる筈だ！』

途中、彼らからしばし遅れて駆け付けた女子チームや、頭を冷やすと言つて一人離脱していた眼鏡の男子生徒、更にもぐさそうな小柄の女子生徒なども援軍として参加したことで、彼らは何とかガーゴイルを退けた……誰もが確信した、その瞬間。

『え……』

『危ないっ！』

金髪の女子生徒……アリサに向かって、ガーゴイルは風の魔法で生み出した圧力弾を放ち、気が付いた時には彼女を庇うようにしてリインは飛び出していった。

間一髪、風の魔法はアリサにぶつかる前に、その間に割り込んだリインに炸裂する。腹を殴打されるような痛みに、堪らずリインは膝を着いた。

さすがに照れている場合ではないと思つたのか、アリサは自分を庇つて崩れ落ちたリインに駆け寄り……痛みに悶えつつも身体を起こした彼の眼差しを見て、びくりと身を竦ませた。

『し、しつかりなさい！ 傷は……』

『あいつててて……て、めえっ！』

『つて、え？』

あえて音にするならば、*“ぎろり”*とかそんな擬音が付くだろうか。鋭く、荒々しい

視線でガーゴイルを睨みつけたリインは、刀を構え直すと腰を落として重心を低く取り、足のばねで以てガーゴイルに躍り掛かった――

『くたばりやがれトカゲ野郎おおおっ!』

――凄まじく口汚い叫びと共に。

で、その後。人の変わつたような狂態を晒しつつも僅か一太刀でガーゴイルの首を刎ね飛ばしたリインは、Ⅶ組のほぼ全員から少しばかり距離を取られていたのである。

アリサは未だにリインの豹変に理解が追いついておらず、同じチームだったエリオットからはカツアゲしてきた不良を見るような怯えの視線を向けられている。ラウラとマキアスもまた、決して上品とは言えないリインの先ほどの様子を思い出して眉を顰め、ユースとフィーは知ったことかとばかりに明後日の方向を向いている。

恐がりつつも必死にフォローしてくれたエマの優しさと、全く気にせず健闘を讃えてくれたガイウスの器の広さにちよつと涙が出た。

(やっってしまった……こ、高等学生になったらもうあんな風にはならないと決めたの
に……!)

妹を守ろうと立ち上がった、幼いあの日。自分を奮い立たせるために敢えて乱暴な言

葉で相手を罵り立てたことで、リインには予想の斜め上を行く悪癖が付いてしまった……即ち。

頭に血が上ると、滅茶苦茶口が悪くなる。

馬鹿、阿呆、などの子供のような悪口であればまだ良い方。

酷い時など、果たしてこれは自分の言葉なのだろうかとリイン本人ですら後々になつて疑問に感じるような罵詈雑言の嵐が口から飛び出すのである。

自分でも直そう直そうと常日頃から心がけてはいるのだが、どうにも改善の兆しはない。ふとした時についてい出してしまう困った癖だ。

成人の前ならともかく、いずれ社会に出た時に難儀するのは自分。ましてリインは、養子とはいえ由緒正しき帝国貴族の名を背負っているのだ。下手に誰かに噛み付いたりすれば、いつ何時「シユバルツァー男爵家は長男の躰もなっていない」という誹りを受けるか分かったものではない。自分だけならともかく、家族までもが要らぬ中傷に晒されるのだけは我慢できなかつた。

(これは、下手したらクラスに馴染むどころの話では無いかもしれない……)

士官学校という体育会系なイメージの学校であれば、自分より荒っぽい人間も居るか

もしれないと思つていたのは確かだ。そういつた者達の中に居れば、自然と自分の癖も目立たなくなつて鳴りを潜めるかという打算もあつた。

が、しかし。サラ教官の言によると、順当に行けばこの場に居る九人で二年間を過ごすことになる。ここまでで一番素行が悪そうなのは誰かと言えば、言うまでも無くリンであつた。

果たして実に行儀のよさそうなこのメンバーの中に自分が入り込んだとして、無事に平和で健全な学生生活を送れるのかというと――

(駄目だ、どうあがいても遠巻きにされる未来しか思い浮かばない)

がつくりと肩を落としたリンに、更なる死刑宣告が下される。

「……あー、それと。リン・シユバルツァー君」

「は、はいっー!」

名前を呼ばれ、声の主に目を向ける。すると、苦笑するサラ教官が、何か大事なことを伝えねばならないのに、非常に言い辛そう、といった表情で頬を掻いていた。

「さつきあたしは『Ⅶ組への参加は自由』つて言つたけど、君に関しては話が別よ。君の親御さんから、断るようなら退学させて構わないと言われてるわ」

「へ?」

『厳しい環境での修練によって、息子の癖が矯正できるかもしれないので』とのこと。

学院長や他の先生方も了承しているから、君の場合はⅦ組に参加するか荷物纏めて実家に帰るかの二択なんだけど……どうする？」

「……リイン・シュバルツァー、特課クラスⅦ組に参加させて頂きます」

実質選択肢無えんじやねえかコンチクショウ——言葉にしなかつただけ成長していると思いたい。

もう一度周囲を見てみると、まあ痛いほどに突き刺さる戸惑いと否定の視線。先程いざこざになった二人の男子も含めて、明らかに歓迎されていない。

自身のこれからに抱いていた期待は綺麗に消え失せ、残ったのは倍に膨れ上がる不安。

やっぱり今日は厄日だ、と改めて呟くリインであった。

もしも主人公が女オリ主だったら

もしも主人公が女オリ主だったら。

エレボニア帝国、首都ヘイムダル。人口八十万人を擁する大陸一の大都市の周囲には、その喧騒を避けつつも帝都での職務のため、あるいは近代化されたライフラインの恩恵にあやかするため、いくつかの住宅街が点在している。

帝都東部に位置する近郊都市トリスタもその一つ。しかしながら、西部のリーヴスをはじめとする他の都市とは一っだけ明確な違いがある。

住宅街から北へ進むと見えてくる、小高い丘の上に鐘楼を頂く赤い屋根の建物群——トールズ士官学院。時の皇帝が晩年に設立した、由緒正しい高等教育機関である。

二百年を超える歴史を持つ学院は、多くの優秀な学生たちを輩出してきた。封建国家であるエレボニアを統治する皇族や各州の名門貴族はもちろんのこと、ここ数十年のところで多くの奨学金や授業料の免除措置も整備され、かつては貴族の従者としてしか入学できなかった平民階級にも門戸を開いている。

「へえ、ここがトリスタかあ……ユミルよりもずいぶん暖かいな。雪が全然残ってないや」

そう言つて駅から姿を現した赤い制服の人影も、本日をしてツールズ士官学院へと入学する新入生だった。涼やかな黒髪から覗く紫の瞳を故郷の雪国とは何もかもが違う街並みへと巡らせれば、自分と同じく進学してきた少年少女があちらこちらに見受けられる。

駅前の公園には見頃を迎えるライノの花が咲き誇り、淡い香りと共に駅に行き来する人々を迎える。自分と同じように見慣れない街を眺める学生たちの姿を見渡しながら、これから始まる二年間の学生生活に思いを馳せると、不思議と活力がわいてくるような気がした。

(ここで、二年間学校に通うんだよな……父さんと母さんは快く送り出してくれたけど、エリゼがなあ……)

住み慣れた故郷を出て都会へと進学することに難色を示していた家族。最終的に両親は自分の熱意を認めてくれたが、年の近い妹だけは最後まで良い顔はしてくれなかった。妹もまた帝都の女学院へと籍を置く身だが、それは良家の令嬢たちが花嫁修業を兼ねて進学するような側面の強い学院だからであつて、将来の軍人を養成する教育機関であるツールズ士官学院とは訳が違う。大切な家族が命の危険のある職業へ就くということが、心優しい妹には許容できなかつたのであろう。

幼馴染の少女が説得を買つて出てくれたが、その少女も自分と同じくツールズへと進

学するのだから、親しい同年代の者たちが一度に故郷を離れてしまうということで余計に拗ねてしまった気がする。

(次にユミルに帰る時には何かお土産でも買っていけないと……って、入学早々帰省した時のこと考えてどうするんだ、そんな余裕があるのかどうかだつてまだ解らないのに)

そんな風にうだうだと考え込んでいたからか、背後に近づいた気配に気付くのが遅れてしまう。

「——だーれだつ」

「わあっ!?!」

敵意も何もなく忍び寄ってきた人影に背後から両目を塞がれて、素っ頓狂な声を上げる。驚きに硬直するもすぐに呼吸を整えて、背中に密着する人物——声からして、自分と同年代の女子か——を引きはがす。

トリストアの駅に降り立った人物の中に、こんなイタズラを仕掛けてくるような仲の少女なんて一人しかいない。振り返ってみれば、やはりそこにあつたのは二つに結んだ金髪を揺らす勝気そうな姿。

「あ、アリサっ!」

「あははっ! — 一本取ったわよ!」

「自分で言うなつ、まったく……」

案の定、先ほど思い浮かべていた幼馴染の少女が心底おかしそうにけらけらと笑っていた。

「どうやら同じ列車でトリスタへ向かっていたが、混み合う車内では合流できなかったらしい。」

「久しぶりね。先月あなたがルーレ^{こっち}に来てからだから、一か月くらいかしら？」

「ああ……もうそんな前か。あの時は受験が終わって疲れてたところで進学に必要なものやら買い込んでたから、ロクに記憶に残ってなかった……」

入学試験に引き続き、アリサ、と呼ばれた金髪の少女の地元へ行つた時のことを思い出すが、受験勉強からの解放感が抜けきらないまま慣れない人込みにシヨツピングと言つて連れ出されたことを思い出して顔を青くする。

穏やかな人柄の友人の珍しい顔を見てことさら笑うアリサは、気合を入れるとばかりにその背を叩く。

「ほらほら今からそんなんでどうするのよ。私にあつさり後ろを取られたことと言い、あなた少ししたるんでるわよ。入学式にげつそりした顔で出席するつもり？」

「はいはい、わかっているって」

頭を軽く振って意識を切り替える。

そう、今日から自分たちは士官学生。近年の世論の影響もあつてか卒業生に軍人以外の進路も増えているとはいえ、基本的にトールズ士官学院の学生とは軍人の卵なのだ。背負い袋の肩ひもを握りなおすと、収めていた太刀の鐔がかちやりと音を立てる。武器を持ち、軍学校への門戸を潜る以上は甘えは許されない。そんな調子では劍の師にも笑われてしまう。

「さてと、それじゃあ行くこうか……アリサ、二年間よろしく」

「ふふ、こつちこそ——」

これから学友となる幼馴染に、改めて挨拶を。気の置けない友人が元氣を取り戻した姿に安堵したのか、アリサもまた微笑みかける。

「一緒に頑張りましょうね、リアラ」

そうして言葉を交わしながら、二人の少女は自らの学び舎へと足を向ける。新生活を前にして期待に彩られた笑みは、どこまでも自然体で軽やかで。

制服がどうして入学案内の色と違うのかと首を傾げたり、駅前の喫茶店のケーキに目を奪われたりする姿はどこまでも年相応の子ども達でしかない。

だから、少女たちはまだ知らない。

将来へ向けての通過点でしかなかった高等学校への進学をきっかけに、多くの仲間たちと出会い、祖国の闇を知り、幾多の喜びと、それを押しつぶそうとする悲しみに直面することを。

やがて英雄と呼ばれる少女——帝国北方の男爵家の長女、『リアラ・シユバルツァー』は、後に激動の時代と呼ばれることになる帝国の混乱期へと、小さな一歩を踏み出した。

← 誰得にもほどがあるオリ主設定

リアラ・シユバルツァー

辺境の地ユミルを治めるシユバルツァー男爵家の家人である少女（戸籍上は長女と

なっているが、本人が養子であることに引け目を感じており、生家について他者に語るときはあくまで自分は“家人”であるといった誤魔化し、義妹のエリゼを次期当主として挙げる。

黒髪を肩口まで伸ばしており、紫の瞳は若干たれ目である。

幼少時の記憶がなく、気が付いた時にはユミルにて後の義父であるテオに保護されていた。シユバルツアー家に養子として引き取られてからはユミルにて義理の家族と共に暮らし、ラインフォルトの令嬢・アリサと親交を得るなど、穏やかな日々を送っていた。

しかしその後、魔獣に襲われた幼いエリゼを守るために鬼の力を覚醒させるも、目の前で魔獣を惨殺したことで怯えられてシヨックを受け、一時期部屋に閉じこもって二人とのかわりを断つ。

エリゼは優しい姉を傷つけてしまったことを後悔しており、アリサもアリサで家族に続いて友人との縁まで失ってなるものかと（父が事故死した頃である）二人がかりでアラの部屋へ強行突入。大泣きしながら三人が互いに思いの丈をぶちまけ合ったことで、ノルティア出身の少女たちは固い友情で結ばれた。

このため八葉一刀流に対する熱意はそれほど高くはないが、友人や家族からの理解が得られているという自覚からある程度の自信が付いたことで幾分か社交的な性格にな

る。ただし幼少の頃に自分を引き取ったテオが社交界で心無い言葉を浴びたことを気にしており（妾の子どころか育てて妾にするつもりだ的なことを言われた）、若干の貴族不信・男性不信気味。

子どもの頃、アリサの趣味に付き合つてノリノリでコスプレをしていた時期があり、今でも悪意なく当時の話を持ち出してアリサのSAN値を的確に抉ること多数。ユン老師と共にユミルに來たアネラスに目撃され、一回二人してお持ち帰りされかけた。

例：いつぞやのパンタグリユエルにて。

レン「殲滅天使なんて名乗つてたのもまあ、今にして思えば黒歴史つて奴かしら」

リアラ「あ、わかるわかる。私とアリサも似たような経験あるからねえ。やつてる時はすごい楽しかったんだけど後から思うと結構アレだったなーって」

エマ「リアラさんっ！ リアラさんお願いですからもうその辺で!!」アリサさんが血を吐いて痙攣していますからっ!？」

アリサ「ヤメテヨシテオネガイワスレテイツソコロシテ（びくんびくんちへドツ）」

ユウナ「アリサさああああああん!？」

フィー「めでいっくめでいっく（棒）」

ない？
本人は綺麗さっぱり忘れているが、
“ライン” という名前の双子の兄がいたかもしれ

女オリ主のオリエンテーリング — バラバラな、彼ら —

入学案内に欠片も記述のなかった赤い制服の正体は、入学式を終えて新入生向けオリエンテーリングを行うという会場——古めかしい石造りの旧校舎へと案内されたところで、ようやくその着用者たちの知るところとなった。

トールズ士官学院は出自を問わず門戸を開く学びの場ではあるが、そこはやはり封建国家のエレボニア帝国。

生まれ落ちた階級の違いは、そのまま生涯を通じての生活習慣と文化の違い——差し当たっては平均的な教育水準の違いへと、如実にその差を示す。文明的な生活に必要な程度の読み書き計算を学べる日曜学校と違い、家庭教師を雇っての勉強なんてものは非常にお金のかかるものなのだから。

よって入学の資格そのものに身分の差はなくとも入学後のカリキュラムに顕れる内容の違いから、学生たちは五つのクラスへと振り分けられる。

帝国の騎士たる「臣」として認められ、爵位を持つ家に生まれた貴族の生徒たちは、白い制服を纏うⅠ・Ⅱ組へ。

宮廷とは遠い「民」として生まれ、その代わりに貴族に比べれば多くの自由を獲得し

うる平民の生徒たちは、緑の制服を纏うⅢ・Ⅳ・Ⅴ組へ。

それがツールズの伝統ある学院の運営の一つであつた——去年までは。

特課クラス『Ⅶ組』……今年度より発足した“身分や出自に関係なく”編成された試験運用学級。

これまでと何もかもが違う特別なカリキュラムをこなす生徒たちは、一目でわかる赤い制服を着用することとなつたのだ。

一体全体何を試験運用するためなのか、という問いがリアラの脳裏には浮かんだが——

「……冗談じゃない！ 身分に関係ないだつて!？」

それらを遮る怒号に、素朴な疑問はどこかへと飛んで行つた。

「まさか貴族なんかと一緒の教室で、時代遅れの教育を受けると言うんですか!？」

場所が場所ならその場で逮捕されかねないような持論をぶちあげながら咆哮する緑髪の男子生徒——マキアス・レーグニッツ。しつこいようだがここはエレボニア“帝國”である。

そのまま彼はやれ帝国の階級制度は旧態依然としており云々、搾取する側とされる側の構造が定着して云々と、勢いに任せた演説を繰り広げる。そこに向けられる視線はさまざまだ。

ユーシス・アルバレアやラウラ・S・アルゼイドのような貴族出身の生徒はマキアスの言い草に大なり小なり眉を顰め、エリオット・クレイグやエマ・ミルステインのような平民出身者は貴族を恐れぬマキアスの勢いに若干引いている。階級制度のない他国からの留学生であるガイウス・ウオーゼルは初めて耳にする貴族への不満の声を後学のために真剣に聞いており、そもそも己のルーツを今一つ分かっていないフィー・クラウゼルなどは退屈そうにあくびを噛み殺していた。

そんな中、ひそひそと口元を寄せ合う少女が二人。

「……ねえ、うち以外のエレボニア貴族って本当にそんなステレオタイプな悪者ばかりなの？」

「そんなわけない……とは言えないのかしらね。うちも企業としての利益絡みで嫌な話は結構聞こえてくるし」

搾取とかその辺とは無縁の友情を築いてきたリアラとアリサにとっては二つの階級の対立とは対岸の火事でしかなく、マキアスが提起する帝国全土の問題というのも知識としては知っている、という程度であった。なんならあまりにも慎ましいシユバル

ツアー男爵家の暮らしぶりに、平民としては恵まれた生まれであるアリサが絶句した。とすらあったのだから。

「つつてもいまいちピンと来ないなあ……年末に父さんと長老たちが一緒に郷中のワイン飲み尽くしちゃったのは、平民からの搾取」なのかな。それにしたつて後で郷の女衆から皆どえらい怒られてたけど」

「テオおじさまは何をやつてるのよ……」

清貧を美德とし、民と寄り添い支え合うことを至上とするシュバルツアー男爵家の純粹培養な長女に、若干心配を募らせる親友の姿があつた。

「——それにその君たちも、言いたいことがあるのならはつきり言いたまえー」

そうこうしているうちに、先ほどからユースを相手にがなり立てていたマキアスがリアラ達へと向き直る。どうも二人の内緒話を、自身への批判と受け取つたらしい。

「はつきり、つていうか……あんまりピンと来なかつたもんだから、平民は貴族に搾取されるものだとか言われても何のことかよくわからなくて。うちでも——もが」

「この子の故郷にはその地域一帯を治めてる領主様の屋敷があるけど、領主様も奥様も気さくな人だから貴族と平民の垣根が高くないのよ。薪割りも屋敷の掃除も自分でやるような人達だしね」

「……そ、そうか」

シユバルツアー家ではそんな事はない、と言いさしたりアラの口を塞いでその先をアリサが引き継ぐ——リアラが男爵家の長女だということは伏せるようにして。貴族嫌いをここまで露わにする相手にあつさり実家のことを言おうとする当たり、幼馴染の危機意識の無さについてはそのうち腰を据えて話し合わねばならないかもしれない。

苦笑する二人の姿に毒気が抜かれたマキアスは、それ以上の追及をすることなく押し黙る。貴族の当主が手ずから薪割りをするというのがちよつと信じられなかつたのもあるが、女子二人に食つて掛かつておきながら、やんわりと躲されたのが少々バツが悪かつた。

「ほう、婦女子を相手に声を荒げた挙句に思い違いを謝罪しないのが実力ある平民なのか?……いやはや、女性に対して紳士であれと、旧態依然とした教育を受けた身からすれば、恥ずかしくてそんな真似はとても出来んな」

「ん なつ……何だとお!」

その隙にすかさず揚げ足を取りに行くのは、意外に好戦的な煽り方をするアルバレア公爵家が次男ユーシス・アルバレア。やられたからには倍返ししておきたいお年頃であつた。

「ぬ、ぐぐぐ……そ、そうやってお前たち貴族は、他人を見下して……良いか! 僕は誰が相手であろうと、理不尽には絶対には——」

「はいはいそこまで」

「いよいよヒートアップしかけたマキアスを軽い声色で止めたのは、一段高い教壇に立つ女性——彼らⅦ組の担任になるといふ戦技教官、サラ・バレストインだった。

「価値観の違いや見解の相違なんてのは平民同士、貴族同士だつて当たり前前に発生するものよ。君たちは出会つて間もない新入生だから、これからの学園生活で追々擦り合わせていきなさいな。特に男の子同士だつたらそういうのは夕日の河川敷で殴り合つたり、協力して窮地を乗り越えるうちに自然と気にならなくなつちやうものじゃない?」

「そ、そんなわけないでしょう!」

「こちらから願ひ下げだ、こんな奴と協力など!」

ウインクなど飛ばすサラの言葉に、協力なんてして堪るかと思ひ付くマキアスとユリス。一向に態度が変化しない二人を見やり、サラはおもむろに一歩下がる。

「そつかあ……そうよね、言葉だけじゃなかなか伝わらないわよねえ、うんうん。論より証拠、案ずるより産むが易し。昔の人は良い事言つたもんだわ」

おどけたような口調で教壇の上を歩くサラの右手が、後ろの壁へと着いた瞬間——

「そんなじゃ手つ取り早く、一回みんなで窮地を乗り越えて来てね♪」
がごん、と鈍い音が床を揺らし、サラを除く全員が平衡を失った。

『うわああああー！ー！ー！』

『嘘でしょおおおおおお!!』 あ、リアラお願い受け止めつ……』

『わああつ、アリサ今こつち来たら……あ、――！』

「……お、始まったみてえだな」

旧校舎の一階から聞こえてきた悲鳴の大合唱を聞いて、石造りの二階テラスで待機という名の昼寝に勤しんでいた青年はむくりと身を起こす。気だるげな口調とは裏腹に意識はしっかりとしており、それがわかつていた傍らの女性もまた、常の会話のノリでその言葉を拾った。

「ああ、どうやらサラ教官は本当にあの仕掛け床を使つたらしいね」

「うっわえげつねえ。後輩君たちカワイソ……」

「まったく、設置したのは我々とはいえ同情を禁じ得ないよ。ああ、ただ……」

そこで女性はふと俯き、旧校舎の地下へと飲み込まれていったであろう哀れな後輩たちを想う。しばしの沈黙の後、やおら自らの肩を抱くようにして天を仰いだ。

「バランスを崩しての不意の接触と、暗い地下での小さな冒険。お互いがお互いしか頼れないような状況で、少女たちに芽生える友情と小さな愛……良い。実に良いシチュエーションだ！ ああつ、どうして私はあの場にいることができなかつたんだ！」

「今からでも遅くないから落とし穴に飛び込んでいっぺん頭のどつかぶ^溜つけて来い。つか同級生だけじゃ飽き足らず入ったばっかの後輩にまでコナかけるつもりかテメー」
「何を言うのだね友よっ！ 可憐な少女あるところ、少女たちの笑顔を遍く照らす太陽となるのが私の果たすべき使命さ！」

「聞いた俺が馬鹿だったわ」

そんなときである。コントのような軽妙なやり取りをする二人に、また別の人影が声をかけた。

「二人とも、盛り上がつてるところ悪いんだけどこつちもちよつとした問題が発生したよ。アンは後輩の女の子のことよりも、ひとまずこちらの解決に注力して欲しい」

「問題? ……ふむ、ジオルジュ。言うに事欠いてこの私に、少女たちとの戯れより優先しろとまで言うんだ。よもやくだらしない用事ではなからうね」

アン、と呼ばれた女性性は、恰幅の良い男性……ジオルジュに向かってこころなしか鋭い視線を向ける。その反応も織り込み済みのジオルジュは、苦笑いを浮かべながらある一点を手で示す。

そこにあつたのは、一階の様子をうかがいながら顔を青くする小柄な少女の姿。つい数十分ほど前まで後輩たちの充実した学生生活をサポートするべく、小さな身体に気合を入れて瞳を輝かせていたのだが、今現在は生まれたての小鹿の様に全身を震わせ目元には大粒の涙を浮かべていた。

「……ま、まさかサラ教官がほんとにあのトラップを使っちゃうなんて……! どうしよう、落つこちる先に危険物が無いのは確認したけどそれだつて万全じゃないし、中には受け身なんて取れない子もいるかもしれないし……あうう、万が一床に叩き付けられてケガとかしちやつたらどうしようお……!」

「あの割かし危ないトラップ設営の片棒を担いじやつたと知つた我らが生徒会長が、罪悪感と心配で押しつぶされそうになつてるから」

「トワああああ大丈夫だよトワああああああだからお願い泣かないでええええええええええええええ!!」

ジョルジュの解説が終わるか否かで、弾丸のように飛び出したアン——アンゼリカが小柄な少女に熱烈なハグ。体格差故に吹っ飛ばされそうになりながらもその衝撃を受け止めた少女……トールズ士官学院生徒会長トワ・ハーシエルであったが、アンゼリカの胸元にすっぽりと頭を抱きこまれて目を白黒させていた。

「ひゃあああ！ あ、アンちゃんなに急にっ!？」

「ああっ、後輩たちを心配する物憂げなトワもまた美しいが、どうか涙を拭いておくれ。あの中には私のライバルともいえるリアくんも居る。彼女がいる限りは新入生たちも滅多なことにはならないさ。だからほら、いつもの太陽のような笑顔を見せてくれたまえっ!」

「あ、それなら安心……ってちよちよちよっ、そ、それはわかったけどアンちゃんさつきからどさくさに紛れてどこ触ってるのっ!? いやああクロウくんジョルジュくん、たーすーけーてー……っ!!」

ぐへへよいではないかよいではないか、とストレートに気持ち悪いうめき声を漏らすアンゼリカから逃れようともがくトワだが、そのトワに助けを請われる青年二人はマイペースに会話を続ける。いつものことだし突っ込むのが面倒くさいわけでは決してない。

「こいつのライバルねえ……ああーそーういや後輩の女がずいぶんとモテモテだとかで『私

のハーレムが奪われるー』とか騒いでたっけか」

銀髪の青年はいえ、アンゼリカが挙げた名前に反応する。彼女との何気ない会話で、幾度か耳にした名前だったのだ。

「同郷の女子……アリサさんだっけか？ その子とも幼馴染で随分仲がいいって話だったけど、アンほどあつちこつちに声をかけていたようには見えなかったね」

二人が思い返すのは、先ほど悲鳴を上げながら落とし穴へと姿を消した黒髪の女子。女性とみれば節操なく口説きにかかるアンゼリカをして「最大の脅威」と評される新入生に、いったいどんな問題児かと密かに戦々恐々していたが、ふたを開けてみればどこにでもいそうな落ち着いた少女。正門前でトワと会った時にも特に妙な反応はしなかったらしく、正直なところ肩透かしを食わされた気分であった。

「……その反応も致し方あるまい。だが無自覚ゆえに恐ろしい天性の人たらし、というものが、この世界には存在するのだよ……断言しよう。今年の一年生の人間関係はだいぶ波乱に満ちたものになる。ノルティアの『初恋キラー』の名は伊達ではない」

「おーおーそりや恐ろしいこつて……ま、ゼリカ以上のトラブルメーカーなんざそうそう居ないだろ。名前負けであることを祈つとくよ、俺は」

なんだとー、というアンゼリカの抗議を一切無視して、地下校舎での特別オリエンテーションへと叩き込まれた一年生たちをフォローするべく、銀髪の青年は階下へ続く

階段へと足を向ける。

この数か月後。

銀髪の青年——トールズ士官学院二年生クロウ・アームブラストは、アンゼリカの言葉の意味を痛いほどに思い知る。

黒髪の少女を相手に大いに動揺し、やきもきし、みつともなく振り回される自分の姿など、彼はこの時点で想像もしていなかった。

場面は戻って、旧校舎地下——落とし穴へと飲み込まれたVII組の学生たちは、幸いにも大きなケガもなく着地していた。

「あたたた……アリサ大丈夫？」

「え、ええ。咄嗟にリアラが受け止めてくれたから……」

「……二人とも無事で何よりだが、よかつたらそろそろ退いてもらって良いだろうか」

「うわあごめんっ!?! 私つたら何てトコに座ってっ!?!」

「きやああ!! ぐ、ごめんなさい大丈夫っ!!」

互いが互いをかばう形で床への激突を免れたアリサとリアラが、自分たちの下で若干青い顔をしているガイウスに気付いて慌てて彼の上から飛び退いたり。

「あわわ、すみませんすぐに退きますからっ!」

「い、いや気にしないでくれたま——ぐふうっ!」

「……む、すまん」

眼鏡の少女エマをどうにか受け止めつつも背中を強打したマキアスの上に、不幸なことに続けてユーシスが降ってきたり。

「ふむ、皆目立つようなケガはないようだな。レーグニッツとやらが少し心配だが、まずはそれだけが幸いか……そなた顔が赤いぞ? どうしたのだ?」

「何でもない……何でもないから降ろしてお願い……!」

危なげなく着地したラウラの腕の中で姫抱きにされたエリオットが羞恥やら何やらで、自身の髪の色に負けないぐらい真っ赤になっていたり。

「よつと、肩借りるよー」

「おおっ!」

最終的には、全員から一拍遅れて落下してきたファイがラウラの肩に手を突いてくるりと身を翻しながら降り立ったところで、改めて全員が態勢を整えた。

「ご、ごめんね思いつき尻に敷いちやつて。ケガとかない？ 私重くなかった？」
「いや、そちらこそどこか痛む場所は無いか？」

アリサを起こしたリアラは、続けて床に倒れ込んでいたガイウスを助け起こした。女子二人分の重量を受け止める羽目になったガイウスだったが、体格に恵まれた彼には致命的なダメージとはならなかったらしい。互いに気遣いながら起き上がったリアラとガイウスは、土ぼこりを払ったりしつつ周囲を見渡した。

「ありがとう、おかげで私もリアラも無事だったわ」

「礼には及ばない。それに俺よりも——」

アリサからの感謝の言葉に控えめに返すガイウスが視線を移す。つられて二人がその先を目で追うと、エマに支えられながらよろよろと起き上がったマキアスが、頬を掻きつつ目を逸らすユーシスを睨みつけていた。

「いや本当にわざとではなかったんだがいかんせん落ちた位置が悪かった、許せ」

「げっほごほっ、き、貴様ああ……！」

「す、すみません！ 私が一人だけ避けたから……」

目じりに涙を浮かべて鳩尾を擦るマキアスに、流星に申し訳なきを感じているのかユーシスが（彼の中では比較的素直に）謝罪する。しかしマキアスからしてみれば先ほどのまでの険悪な雰囲気と併せて今の打撃である。激しく咳き込みつつも今にもユーシ

スへと殴り掛からんばかりの勢이었다。

マキアスに受け止められたエマが取り成そうとしているが、どうにも効果は出ていないようだ。

「ま、まあまあ落ち着いてよ。ちよつと言いはアレだけど、アルバレアの若様も誠心誠意謝ってるんだから……」

「この態度のどこが誠心誠意だ!? 口先だけで済まそうとしているのがだだ漏れじゃないか! どうせこつちが平民だから適当に済ましてしまおうとか考えているに決まってるっ!!」

「……ほお、俺の謝罪にそこまで価値がないと言うのなら、撤回しても問題はあるまいな?」

ラウラの腕から解放されたエリオットも貴族との諍いを恐れてマキアスを宥めるものの、さすがにここまで悪し様に言われては、ユーススだって黙っている義理はない。

喧々諤々と言ひ合いを始めた二人をどうするかと、リアラとガイウスは宙を仰いだ。

「どうにか止めてみる……このままじゃ本当に、地下室で一日目が終わっちゃいそうだし」

「俺も手伝おう。順当に行けばこの9人で二年間を過ごすのだから、初めから諍いばかりというのも面白くない」

止まりそうにない口喧嘩を仲裁するべく、二人は大声の中心へと足を向けた。

女オリ主と副委員長とのあれこれ・4月

(……どうしてこんな状況になっているんだ)

ライノの花も見頃を終えて、舗装された石畳の道へとちらほら花卉を落とし始めた頃。

近郊都市トリスタの一角にある宿酒場『キルシエ』……その軒先に設置されたオープンテラスで、マキアス・レーグニッツは眉間に大層深いしわを寄せていた。

週に一度、士官学院の学生たちにも訪れる休息の日。普通の学校と違ってあくまで休日ではなく自由行動日という呼び名だが、彼が午前のうちからお気に入りのお店でコーヒーを飲める日という事実で大して変わりはない。

進学先の街に美味しいコーヒーを出してくれる店があるというのは、父親ともどもコーヒーを数少ない趣味とするマキアスには僥倖だった。

春のあたたかな日差しを浴びながら勉学に励みつつ、慣れ親しんだ苦みと酸味を味わえるというのは、平民出身の自分にとってはこのうえなく充実した時間である——と思っていたのだが。

「はふうー……やっぱりここのコーヒー美味しいねえ。マキアスが気に入るのも分かる

な

「……そうか」

どういうわけだか、おおよそマキアスにとって天敵でしかないはずの貴族出身の女子学生が、目の前で同じものを飲んで幸せそうに頬を緩めていたのであった。

(いや、本当にどうしてこうなった)

我に返って内心で頭を抱えるも、どうにも気の抜ける目の前の笑顔が雲散霧消することもなく。

両手で持ったマグカップの中身をふー、と吹いて冷ましながら堪能するリアラ・シユバルツァーのほほ笑みに、マキアスは数十分前のことを思い返す。

自由行動日を迎えたトールズ士官学院の学生たちは、大概が羽を伸ばそうとトリスタの街へと繰り出す。

そんな中、マキアスが宿酒場の軽食・喫茶コーナーなどという洒落た場所を訪れたのは、純粋に美味しいコーヒーを求める以外にも、落ち着いて宿題に取り組める場所を探してのことだった。

『キルシエ』の本業は宿泊と食事であるが、有名な学院を擁する街において、商業施設

は軒並み学生向けのサービスを何かしら行っている。

例えば書店であれば教科書や参考書の優先販売や取り寄せサービスを。例えばブティックであれば学生服や体操着といった衣服の手配の他、修繕の受付を。

そして宿酒場では、混雑や夜間の時間を除いて、学生たちに宿の一部スペースを自習室として提供しているのである。

「お、今日も来たなあコーヒー坊や」

「ははは……その節はどうも」

若い店主のからかい交じりの歓迎に、頬を掻きつつ会釈する。

初めてこの店を訪れた際、他の客がいなかったこともあってか豆の挽き方からドリツプの方法までカウンターをのぞき込みつつ色々と質問してしまったのがきっかけで、マキアスは店主フレッドに妙なあだ名で呼ばれていた。

普段であればカウンターで二、三、他愛のない世間話をしつつ、フレッドが丁寧にハンドドリツプで淹れてくれたコーヒーを待ちながらノートと教科書を広げるのだが、その日の『キルシエ』は珍しく混雑していた。

「今日は表のテラス席の方で良いか？ つつてもお前さんトコの学生さんと相席になっちゃまうけど……」

「ああ、はい。先客が良いんなら僕は構わないですよ」

「すまないな、この分はサービスさせてもらおうぜ」

自習スペースとして使える部屋が満室と聞いてテイクアウトも考えたが、せつかくならば腰を落ち着けて楽しみたい。

どうせ鼻持ちにならない貴族生徒ならば平民の学生との相席なんて断るだろうし、承諾されたなら相手に心配はないだろう——マキアスはこの時、無意識の傲慢とも呼べるような考えで以てテーブルへと歩を進めたのであった。

それから数分のうちに。

案内されたテーブルには、数学の教科書に突っ伏してうんうん呻いていたリアラの姿があり。

貴族としても年頃の女子としてもどうなんだそれ、という姿に絶句しているうちに彼女の頼んだ深煎りコーヒ^ルーを運んできたフレッドが「せつかくだから教えてあげたらどうだ？」といらんことを言い出し。

あれよあれよという間に、まとめて一皿に盛り付けられたクッキー（相席することになった二人へのサービス）を挟みつつ、気が付いたら勉強会のような催しが始まってお

り。

「終わったーっ!! マキアスありがとーっ!!」

「お、おほ……」

課題をこなし達成感にガッツポーズなんぞ決めるリアラの姿に若干引きつつ、マキアスはすっかり冷めた自分のコーヒーに口を付けた。

「あ、私もおかわりしようかな……今度はカフェオレにしてもらおっと」

自分のカップが空になっているのに気づいたりアラが、マキアスのカップから漂う香りに反応してフレッドへと注文を伝えに行く。

上機嫌に席を立つその背を見つめながら、マキアスはぼつりと呟いた。

「……そういえば、紅茶じゃなかったな」

突如として始まったプチ勉強会にすっかり気を取られていたが、リアラは終始マキアスと同じく深煎りのコーヒーを飲んでた。

貴族出身の人間というものは、気取った作法やらなにやら必要な紅茶しか飲まないものだと思っていたのだが……思えばリアラは、マキアスのイメージしていた貴族の女性とはどうにもかけ離れたところが多い女子だった。

(確か、オリエンテーリングの時もそんな感じだったか)

思い返すのは数週間前。リアラとマキアスを含めた九人が同じクラスに所属すると

決定した、あのオリエンテーリングの日のことであつた。

『その、他意はないんだが……階級を聞いておいてもいいだろうか?』

自分でも若干、ぼつの悪い声が出てしまったのを覚えている。

それまで大貴族の御曹司であるユーシス・アルバレアを相手にぎゃんぎゃんとなり立てていた自分がそんなことを言えば、彼と同じく尊い血を引く者たちは良い気分はしないだろう。

しかしながらマキアス・レーグニッツが十数年の間に培つた常識や過去の経験というのはそうそう変えられることなく、マキアスとて貴族から好かれようなどと思つてゐるわけではない。

自分にとつて蹴落とすべき敵を見極めたい、というマキアスの言葉なき声に、その場にないた者たちはそれぞれうなずいたのであつた。

入試で主席を勝ち取つたという眼鏡に三つ編みの女子と、大人しそうな赤毛の男子は平民出身。長身の留學生は出身地にそもそも階級制度がないらしく、銀髪の小柄な女子は雰囲気からして色々と違つていた。

そして、青髪の剣士——ラウラ・S・アルゼイド。帝国正規軍の剣術指南役を務める剣士の血を引く、アルゼイド子爵家の一人娘。会つてまだ間もないが、それでも貴族を忌み嫌うマキアスでさえ納得してしまうほどの善人。

マキアスがなぜ貴族を嫌うのかは知らないが、と前置きした上で、それでも父も自分も空の女神に顔向けできない生き方はしていない、と断言され、そのまっすぐな瞳に圧倒されてしまった。

……問題は、ここからだ。

『あ、えつと私は……』

『——どつちだと思う?』

黒髪の女子……リアラが自己紹介をしようとしたところで、隣に立っていた金髪の女子がその言葉を遮る。

一歩前へと踏み出したアリサは心持ちリアラを庇うような姿勢で、不躰な質問を投げかけたマキアスを睨んでいた。

『……どういう意味だ』

『言葉通りの意味よ……私とこの子はそれぞれ貴族と平民だけど、そのどつちが正解なのかこの場であなたに教えるつもりは無いわ』

『隠し事をするのは、何かやましいことがあるからなんじゃないのか?』

『やましいことがあったとして、法の番人でも、まして空エイドスの女神でもないあなたにそれを責められる謂れはないと思うのだけれど?』

『ちよ、ちよつとアリサつ、落ち着いて……!』

なまじラウラとの会話で相手が終始理性的な応対をしてくれたからか、アリサの言葉に込められた棘はそれはもう分かりやすく神経を逆なでしてきた。

あからさまな挑発にマキアスは柳眉を逆立てるが、一泊おいて自分に言い聞かせる。ここでまた頭に血を上らせれば、アルバレアの次男坊の時と同じくいけ好かない貴族の思うつぼだ、と——自身にとつて敵対的な態度を取る者はみんな貴族だという思い込みに、彼はこの時点では気づいていなかった。

『……この場で、ということとは後でしつかり説明してくれると思つていいのか』

『何もずつと秘密にしておけるなんて思つてないわよ。ここから出られる頃には教えてあげる……それまでに、背中から撃たれるような理由を増やしたくないだけだもの』

『貴族が相手なら僕がそんな真似をすることも言うのか……！』

『あなたが階級を聞いたのはそのための相手選びじゃないのかしら？』

『——アリサつ、いくら何でも言い過ぎだつてば！』

親友の暴走を見るに見かねたりアラが止めに入らなければ、マキアスはその場でアリサに殴りかかっていたかもしれない。

『ごめんね、友達がいろいろ踏み込んだこと言つちやつて……この話はまた後で良い？ たぶん、今は誰も冷静に話せないだろうし』

『あ、ああ……』

アリサを窘めてくれたリアラにまたしても毒気を抜かれたというのもあってか、結局マキアスはその場で二人の正体をそれ以上問いただすことはなかった。

それからマキアスは、難題を与えられたのならせいぜい軽くこなして鼻を明かしてやる、とばかりに二人のことをつぶさに観察し、オリエンテーリングが終わった時には彼女たちの隠し事をつまびらかにしてやらんと備えていたのだが……

『——リアラ・シュバルツァー。特課クラスⅦ組に参加します』

『アリサ・ラインフォルトも同じく参加します……ARCU Sのことについても聞きたいことが山ほどありますから』

『シュバルツァー男爵家の娘さんに、ラインフォルトの社長令嬢は参加、つと……やつぱり一番乗りは貴女たち二人だったわね』

なし崩しに全員で共闘することになったガーゴイル戦の後、マキアスの予想は半分近くがひっくり返された。

自分に対して高圧的な態度をとっていた金髪の少女は貴族の令嬢でなくあくまで平民の出身であり。

そんな彼女を窘めて自分にも済まなそうに頭を下げた黒髪の少女は忌むべき貴族の

令嬢だった。

(ラインフォルト……つて、この学院の理事の娘じゃないか。いやそれ以前にルーレのラインフォルト社の……それに、あっちの腰の低い女子が男爵家の長女?)

下手な地方貴族よりもよほど規模の大きい大陸一の重工業メーカーの娘が、辺境の小貴族の娘と一体全体どんな縁があったというのか。

貴族と平民は住む世界を違えるもの、と信じて疑わないマキアスにとっては、今一つ理解の及ばない関係だった。

……正確なところを詳しく知るのはだいぶ後になるのだが、平民らしからぬ平民として故郷で浮いていたというアリサは、貴族らしからぬ貴族であるリアラが貴族の価値観に翻弄されていたことを知っていたのもあつてか、単純かつ極端に人を区別するようなマキアスの物言いにそれはそれはご立腹だったらしい。

さすがにそれが判明する頃にはマキアスも自身の不明を素直に謝れるようになっており、二人の少女はマキアスの謝罪を快く受け入れてくれるのだが、それはそれとして。

「マキアス? おーいマキアスー」

「うお!? ……な、なんだね急に」

思案に耽っていたところに話しかけられて、マキアスは思わず椅子を揺らして振り返る。

するとそこには、湯気の立つカップを二つ、それぞれ両手に持ったりアラが立っていた。

「フレッドさんが、新作のテイステイキングしてほしいって。これもサービスらしいし、せっかくだから一緒に飲まない？」

見れば、リアラが手にしたコーヒーの中身は真っ黒なコーヒーではなく、たつぷりと牛乳が入った液面から甘い香りを漂わせる別の飲み物だった。砂糖を入れることは想定していないのか、ソーサーに添えられていたのはスプーンでなくシナモンスティックだ。

なかなか見る機会のない珍しい代物だが、『キルシエ』の新メニューならば外れはないだろう。自分の分まで運んできてくれたリアラへ素直に礼を述べつつ、席に着いたりアラと一緒にカップを口に運ぶ。

「む、バニラか何か入ってるのか。美味いけどさすがに甘いな……」

「そうだねえ……でも良い香り。あ、そういえばちよつとだけ塩が入ってるんだって」
「塩!?! カフェオレとバニラにか!?!」

「そうそう、確かに後味はあんまり甘さが後引かないような気がする」

「言われてみれば……これはなかなか興味深い。コーヒーに塩なんてベタな間違いでしか入れないもんだとばかり思っていたが……」

しばしそうしてやいのやいのと未知のドリンクで喉を潤しつつ講評を交わしていた二人であったが、そろそろ飲み干すという頃に、不意にリアラが笑い声を漏らす。何かと思つて見てみれば、マキアスに視線を向けるリアラがにこやかに笑っていた。

「ど、どうした、何かおかしいなどころでもあったのか？」

「いや、私マキアスには嫌われてるかと思つてただけど、コーヒーの話だとして普通に話せるんだなつて思つて」

言われてはたと我に返ると、塩とバニラの入った新作カフェオレを受け取つてからこちら、マキアスはリアラと普通に共通の話題で盛り上がっていた。

「アリサのこともあつたし、当然私も避けられるかなつて。さすがに同じクラスで全然話さない人がいるつて、ちよつと寂しかったから」

「……その、シユバルツァーは、一体何がきっかけでラインフォルトとあんなに仲良くなつたんだ？」

オリエンテーリングの日以来、いまだアリサとマキアスとの冷戦は続いたまま……というか、流石にあの状態からすぐに「平民同士仲良くしようぜ」などとほざけるほど、マキアスは恥を知らないわけではなかつた（却つて意固地になつているのは自覚しているで目を瞑つてほしい）。

しかしリアラも同じかというと、生徒手帳を部屋に届けられた時もそうだったがそう

そうつつけんどんな態度を取られるようなこともない。

なんとなく、気になっていたことを聞くのは今だと思つた。

「あれからいろいろ考えてみたんだが、なんで君たちが……同じ町に住んでゐるわけでもない貴族と平民が、どうしてあんな風に、本当の姉妹のようになれるんだろうと思つて……」

マキアスの問いに、リアラは懐かしそうに過去を振り返る。

「んつとね、小さいころにアリサが家族と一緒にうちの郷に湯治に来たんだ。そうしたら途中でアリサが迷子になつちやつて、家族の人たちが大慌てで探してたから私の両親も放つておけないつて言つて手伝つて。父さんが裏山の方を馬で見に行つた辺りで、入れ違いになるように郷の入り口でぐつたりしてたアリサを私が見つけて……それから私の家で手当てしたのがきつかけで、家族ぐるみで付き合うようになったの」

「い、意外とお転婆だつたんだな、あいつ……」

リアラの故郷——シユバルツァー男爵領といえは温泉で有名な観光地としての一方で、北方の山奥ゆえに雪害の危険も広く知られてゐる場所である。

そんな場所で幼い娘が姿を消したとあつては、アリサの家族はさぞかし肝を冷やしたであらう。

「最初は同年代の女の子つてことでちよつと話した程度だつただけだね。その後アリ

サの家があこのラインフォルト社だつてわかつてから最新の導力家電のこととかいろいろ話を聞いてるうちに、いくつか郷で必要なものを買ってみようって話になったの。それで、今度は私達一家が観光がてらルーレまで行って、宿屋に置く業務用の冷蔵庫とかを買って……それから一年に何回かお互いの家を行き来するようになったって感じかな」

「……それ、顧客カセとして目をつけられたつて言わないか？」

「あー……そう言われるとそうなんだけど……郷の懐事情とか、あと私も家族もそんなに機械は詳しくないから安くて分かりやすく頑丈な型落ち品いくつか見繕つてもらったりで、結構お世話になつたんだよねえ……」

ノルティアア州の貴族の中でもうちは特に貧乏な方だし、と、やおら遠い目をし始めたリアラを眺めつつ、マキアスはぼそりと呟いた。

「なんというか……君よりもラインフォルトの方がよっぽど『お嬢様』って感じなんだな」

この数十分の間に、マキアスの中ではリアラという少女に対して、ずいぶんと警戒心が薄れていた。

紅茶よりもコーヒーを好んだり、実家の経済事情を思つて悟つたような表情を浮かべたりと、彼のイメージの中にあつた『良家の子女』という高飛車なイメージが木っ端微

塵に粉碎されたというのもある。

話してみればずいぶんと気さくで、親しみがわく人柄だというのもあった。

ゆえにマキアスとしては、貴族にしては随分ととつきやすいクラスメイトに向かって深い意味もなく放った一言だったのだが……

「……あの、いくら私が女らしくないって言っても、真正面から言われるとさすがに傷つくんだけど」

あにはからんや、リアラの方はどえらい眉をしかめて明後日の方角にへそを曲げてしまった。

「……そ、そうは言っていないだろう!?!」

「いやですよー。どうせ淑女のマナーもなっていないし剣の稽古と薪割りで手だつてごついし、初対面のアリサには男の子に間違えられましたしー」

「ええい不貞腐れてないで人の話を聞きたまえ!」

本格的に拗ね始めたリアラに、さしものマキアスも泡を食って釈明を試みる。

貴族に媚を売るつもりは毛頭ないが、だからといって公明正大なる帝国男子としては女性を不当に貶めたいわけでも、ましてそんな奴だと誤解を受けたいわけでもないのだ。

「僕はあくまで君が、貴族にしては身構えなくても話せる相手だという意味で言ったんであってだな！ 決して女性らしさについて言及したつもりはない！」

「あ、うん」

「淑女のマナーなんぞあったところで宮廷に近づかなきゃ意味のないものだし、手だつてほら、ごつかりうがなんだろうがサイズは僕の方が大きいだろう」

「うん……あ、ほんとだマキアス意外と手え大きいね」

何とはなしに向けられたマキアスの手のひらに、これまた深く考えるでもなく、リアラは自分のそれをぴたりと重ねる。

「…………え。」

突如として起きたお肌の触れ合いに、今度こそマキアスの思考回路はショートした。

「……………きつ、き、ききき君なあ!？ そ、そういうことを平然とつ……………！ 平然とする奴があるかあつ?!？」

「へ?……………うそ、もしかして私の手、汗とか着いてた!？ ごめん全然気が付かなかつた」「だあああつ?!？ そうじゃなくて……………はつ?!？」

ノルティア州原産のド天然鈍感少女の破壊力をこれでもかと味わったマキアスは、遅れてそこがオープンテラスの一角であったことを思い出す。

向かいの公園では休日を満喫していた若夫婦とその息子がこちらを生暖かい目で見ていたし、斜向かいの花屋のお姉さんはあらあらうふふとほほ笑んでいた。

げに恐ろしきはご近所ネットワークが実現してのけたARCS要らずの連携戦術。どれもこれも、堅物のマキアスにはオーバークイルである。

「~~~~~っ、し、失礼するっ!!」

「あ、ちよつとマキアスー!?!」

瞬時に顔を赤く染めたマキアスはあわただしく教科書の入ったカバンをまとめ、にやにやと笑うフレッドに代金を支払って店を辞した。

結局当初の目的であった自分の宿題は一ページたりとも進んでいなかったことを彼が思い出すのは昼食の後であったが……午後から自室の机で猛烈な勢いでノートに向かい始めたマキアスは、リアラとの接触到ドキリとしたこと……すなわち、自身が彼女のことを「貴族の女性」でなく完全に「同年代の女子」として認識していたことには、ついで気付かなかった。

塩とカフェオレ、貴族と平民——そして、リアラとマキアス。交わるはずも無いと言われるものが、互いを尊重することで全く新たな光が生まれると理解した時。

狭く、凝り固まっていた少年の目に映る世界は、加速度的に広がっていくことになる。